巻頭言

銅鐸について

河村哲夫

銅鐸に関する記録

『続日本紀』和銅六年（713）の条に次のような記事がある。

「七月六日大倭宇太郡波坂郷の人、大初位上村君東人、銅鐸を長岡野の地に得て献る。高さ三尺、口径一尺、その制、常に異にして、音、律呂に協う。所司に勅して蔵（おさ）めしめたまふ」

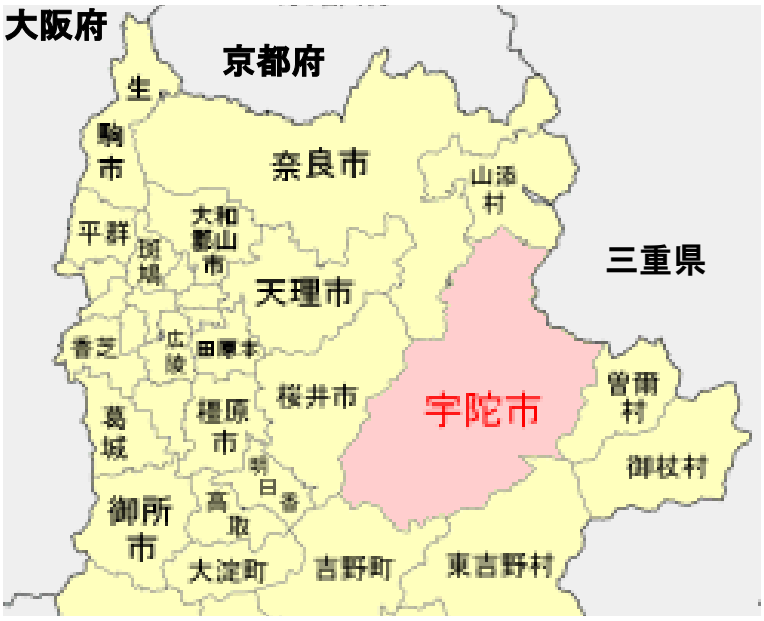
訳すれば次のとおり。

「七月六日大倭宇太郡波坂（なみさか）郷の人、大初位上の村君東人（むらのきみあずまひと）は、長岡野の地で銅鐸を得て献上した。高さ三尺・幅一尺で、その造りは、普通と異なっており、音色は音楽の規則にかなっている。そこで担当の役所（雅楽寮）に命じて保管させた」

現代でも用いられている「銅鐸」という名称は、この記事に由来する。

「大倭宇太郡」というのは、大和国宇陀郡（奈良県宇陀市）のことである。

「波坂（なみさか）」とは、『和名抄』高山寺本には「奈无左賀」、刊本には「奈無佐加」とあり、「なむさか」と読む。『大和志』は宇陀市菟田野町【宇陀郡菟田野町大字平井（ひらい）小字ナメン坂】に比定する。



銅鐸を献上したのは、「大初位上・村君東人（むらのきみあずまひと）」という下級貴族である。大初位上（だいしょいのじょう）とは、従九位の下、少初位の上の位階をさす。

正一位	正二位	正三位	正四位	正五位	正六位	正七位	正八位	正九位	大初位
従一位	従二位	従三位	従四位	従五位	従六位	従七位	従八位	従九位	少初位

銅鐸出土地の「長岡野」は、宇陀市榛原八滝の長坂か岩崎南方の大字陀小和田字岡田あたりとみられている(『宇陀市内遺跡調査概要報告書 2010 年度』宇陀市教育委員会)。

銅鐸の大きさは「高さ三尺・幅一尺」。

『大宝律令』の大尺(高麗尺・土地の計量など)は「1 尺= 約 35.6 cm 」、『大宝律令』の小尺(唐尺)は「1 尺=約 29.6 cm」とされているから、これで計算すると次のとおり。

	1 尺	高さ 3 尺	幅 1 尺
大尺(高麗尺)	35.6 cm	106.8 cm	35.6 cm
小尺(唐尺)	29.6 cm	88.8 cm	29.6 cm
平　均		97.8 cm	32.6 cm

佐原眞氏による銅鐸の分類

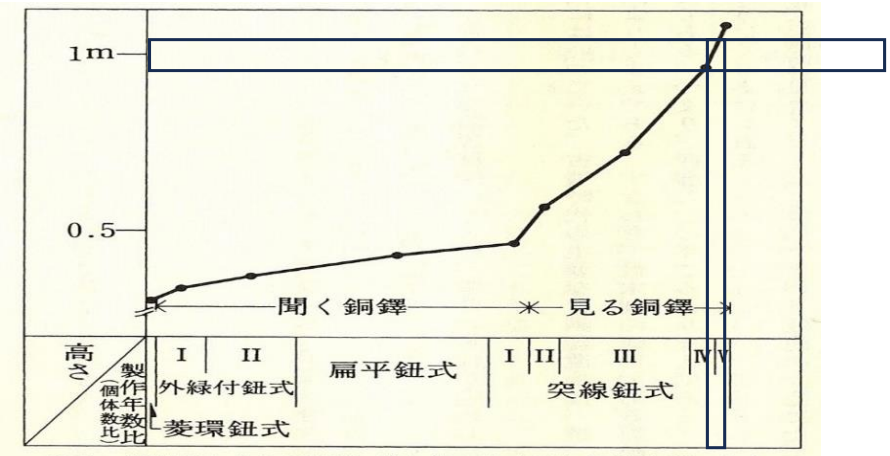
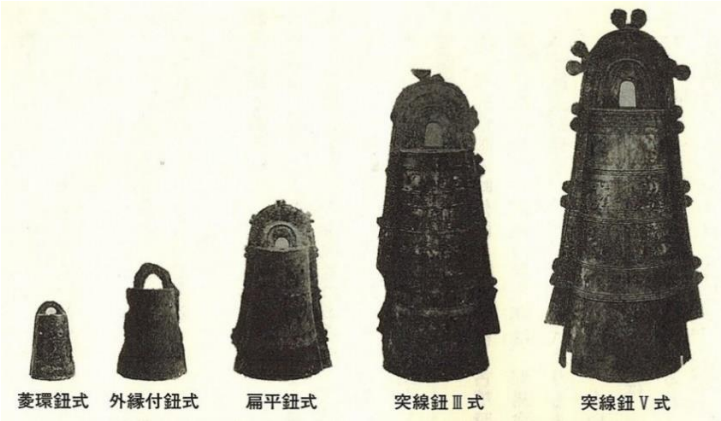


図 7　銅鐸の大きさの変遷 (『古代の日本 5』角川書店による[一部改変])



佐原眞氏(1932～2002)の分類に従えば、奈良県宇陀市から出土した銅鐸は、その大きさからみて、おそらく突線紐Ⅳ～Ⅴ式に属し、楽器としての「聞く銅鐸」ではなくて、大型祭具としての「見る銅鐸」の段階に属している。

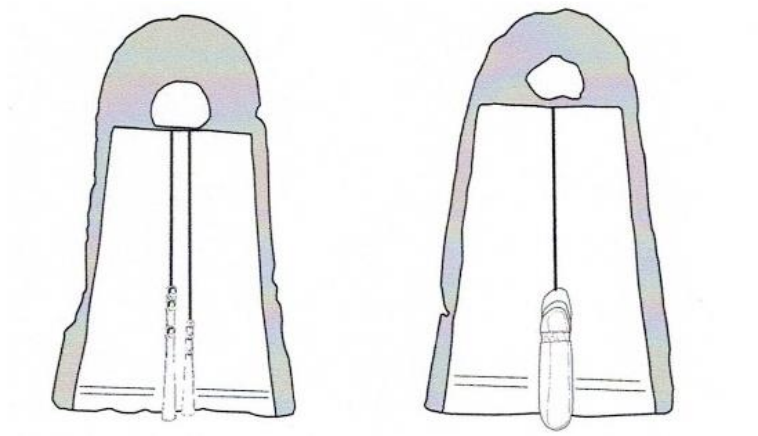
とはいえ、『続日本紀』には、

「音、律呂に協う」――すなわち、「音色は音楽の規則にかなっている」

とあるから、音を鳴らして、楽器としての機能を確認したのであろう。

ところが、佐原眞氏の分類では、突線紐式銅鐸であれば、「見る銅鐸」であり、楽器としての機能は有しないことになる。

この時点で、小型のバイオリンは「聞く楽器」で、大型のコントラバスは「見る楽器」に分類するようなものか。ん？――と疑問を感じられる方もおられよう。



銅鐸の内側には、風鈴のように舌がひもでぶら下がっている。舌は青銅製もあれば、石製もある。ぶら下げた銅鐸を揺らして舌を銅鐸本体に当てて音を鳴らす。複数の銅鐸で合奏すれば、小型の銅鐸は高音、大型の銅鐸は低音で響く。

愛知県埋蔵文化財センターの服部信博氏の「銅鐸に伴う『舌』について」(研究紀要第3号・財団法人愛知県教育サービスセンター・2002)という論文に、

「一方、銅鐸本体より出土した青銅製舌は、泊銅鐸、慶野中ノ御堂銅鐸の２例があるが、ともに外縁付紐Ⅰ式段階に比定される銅鐸からの出土であり、・・これら青銅製の舌を伴う銅鐸は、典型的な『聞く銅鐸』に分類され、古式の銅鐸に位置づけられる銅鐸ばかりである。銅鐸が誕生し、『聞く銅鐸』としての機能を有していた外縁付紐Ⅰ式段階までの銅鐸の多くは小銅鐸と同様に、銅鐸の鋳造時に舌も併せて鋳造されていた可能性が高いと考えられる」

「しかしながら、多くの突線紐式銅鐸に内面突帯が残り、舌状石製品が少なからず存在しているということは、『見る銅鐸』の段階に至っても、なお銅鐸は音を鳴らすものであるという意識を少なからず弥生人が有していたことを示しているといえよう。つまり、弥生時代後期になって、ほとんど音を鳴らさなくなったとしても、銅鐸には舌の存在が必要であったのである。このように考えるならば、『見る銅鐸』は、１ｍを超えるような超大型の銅鐸は別としても、初期の銅鐸のように実際に吊して、当時の弥生人に、その崇高な姿を披露したものと想定され、舌状石製品のほとんどが実用品とは思えないほどに丁寧に研磨されていた事実も納得がいく」

というように、佐原眞氏の分類に従いつつも、「見る銅鐸」の段階に至っても、なお銅鐸は音を鳴らすものであるという意識を少なからず弥生人が有していた、と書かれている。

そして、丁寧に研磨された舌状石製品が「見る銅鐸」の証であり、「初期の銅鐸のように実際に吊して、当時の弥生人に、その崇高な姿を披露したものと想定される」と、まとめられている。

しかしながら、「見る銅鐸」の段階においても、内面突帯と舌状石製品の存在など、音を鳴らすための機能なり痕跡が認められるならば、それは「聞く銅鐸」にほかならない。しかも、石製の舌は銅鐸の内部にあり、どんなに磨いたところで外からはまったく見えない。「実用品とは思えないほどに丁寧に研磨されていた」ことには、別の理由があるのではないか。

ひょっとしたら、低音を響かせるのに、青銅製の舌よりも丁寧に磨いた石の舌が優れていたからではないのか。

服部氏の論を突き詰めていくと、佐原氏の「聞く銅鐸」と「見る銅鐸」という分類に問題が潜んでいるようにおもわれてくる。

そういう意味では、現在までに発掘された約 500 個すべての銅鐸について、村君東人（むらのきみあずまひと）のごとく、実際に音を鳴らす調査をおこなう必要があるかもしれない。

『続日本紀』は、「音、律呂に協う」――すなわち、「音色は音楽の規則にかなっている」と書いている。現代の考古学者が古代人に負けるわけにはいかないであろう。

銅鐸の分布

出雲の荒神谷遺跡と加茂岩倉遺跡から出土した銅鐸のリストが下の表である。

菱環紐式・外縁付紐式・扁平紐式のみが出土し、突線紐式は出土していない。

加茂岩倉遺跡・荒神谷遺跡出土銅鐸の大きさ

荒神谷遺跡銅鐸		加茂岩倉遺跡銅鐸		
菱環鈕	外縁付鈕式	外縁付鈕式		扁平鈕式新段階
1式	1式(II-1)	1式(II-1)	2式(II-2)	(III—2)
cm	cm	cm	cm	cm
21.7	23.4	31.0（4号）	44.5（5号）	46.5（1号）
	23.7	31.5（6号）	44.0（11号）	46.0（8号）
	22.4	30.0（7号）	44.0（21号）	46.0（10号）
	23.8	31.5（9号）	44.2（31号）	45.0（20号）
	23.7	29.5（17号）	45.0（32号）	47.0（26号）
		30.0（19号）	44.0（34号）	46.2（29号）
		31.0（22号）	44.0（37号）	
		31.0（24号）		
		31.5（27号）		
		31.5（30号）		
		30.0（33号）		
		32.0（38号）		
平均21.70	平均23.40	平均30.88	平均44.24	平均46.12

このことから、次のようにまとめることができる。

(一) 出雲式銅鐸

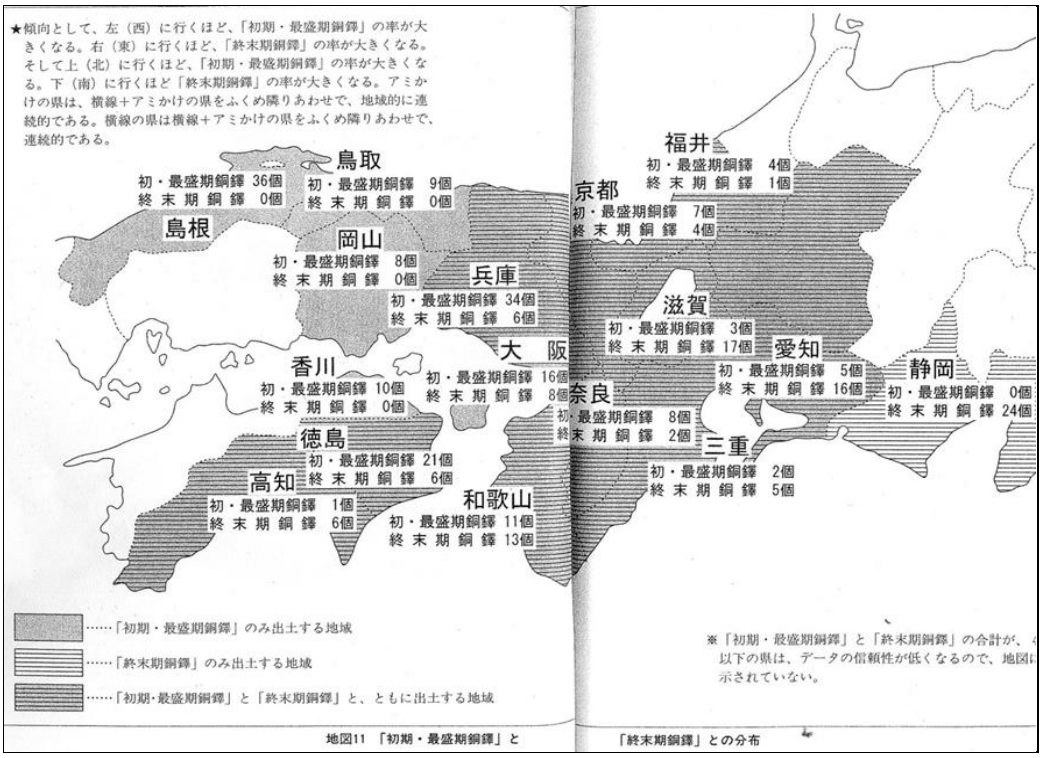
菱環紐式・外縁付紐式・扁平紐式銅鐸の中心地は出雲方面にある。

(二) 三遠式銅鐸

突線紐式銅鐸の中心地は愛知・静岡方面にある。

こういう観点から、安本美典氏は次のような図をつくられた。

最盛期銅鐸は出雲式銅鐸、終末期銅鐸は三遠式銅鐸と読み替えてご覧いただきたい。



地図11 「初期・最盛期銅鐸」と「終末期銅鐸」との分布

そして、出雲式銅鐸(最盛期銅鐸)は出雲の国譲りによって260年ごろ地中に埋納され、

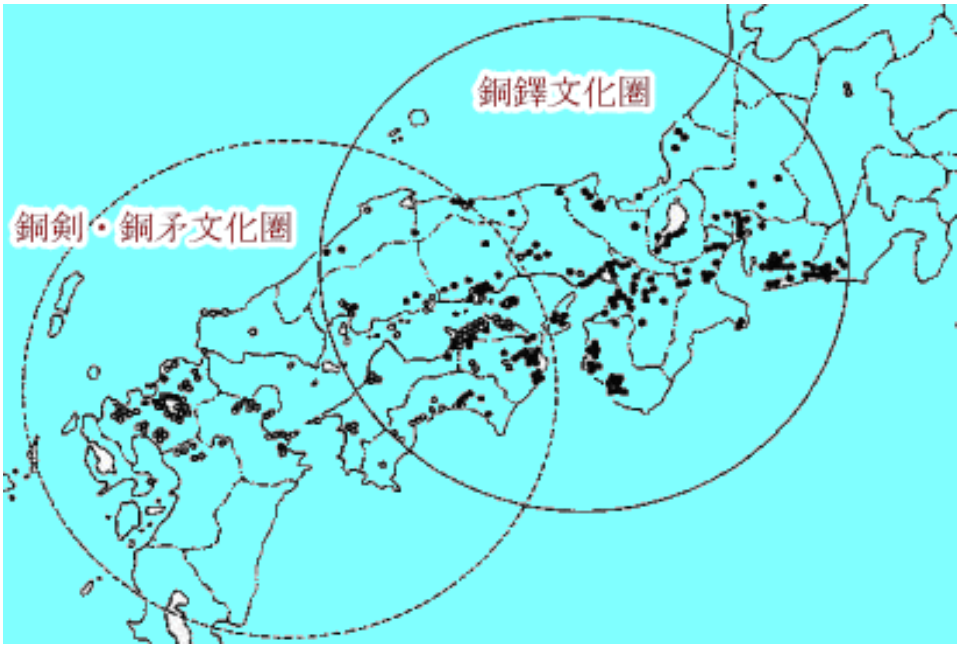
三遠式銅鐸(終末期銅鐸)は 280 年代の神武東遷によって地中に埋納されたとされる(安本美典『邪馬台国と出雲神話』勉誠出版・2004)。

出雲式銅鐸の分布をみると、出雲文化が日本海側と瀬戸内海側に拡散している状況が一目でわかる。

三遠式銅鐸の分布についても、愛知・静岡方面にその中心地があることは明らかである。

銅鐸を祭具としない九州の勢力は、出雲の国譲りによって出雲を中心とした銅鐸文化を断絶させ、神武東遷によって近畿・東海地方の銅鐸文化を断絶させた――という安本氏の指摘がみえてくる。

近畿のなかでも銅鐸をわずかしか出土しない奈良県はどうであろう。邪馬台国の都があったはずの奈良は、銅鐸文化のなかでどういう役割を演じていたのであろう。戦後われわれが中学・高校で学んだ近畿を中心とした銅鐸文化圏とはいったい何だったのだろう。



荒神谷遺跡の大量の銅剣

1984～1985 年の 2 か年の発掘調査によって、銅剣 358 本、銅鐸 6 個、銅矛 16 本**が出土**した。

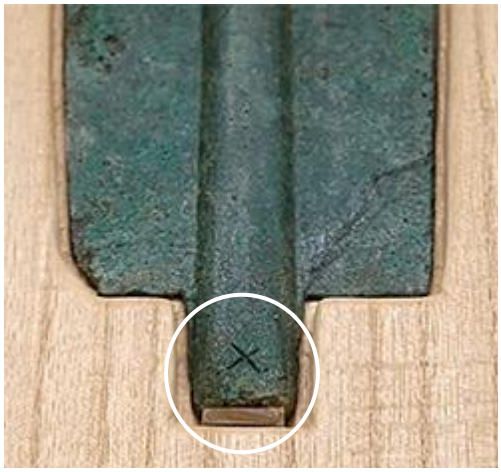
銅剣の一箇所からの出土数としては、現在でも日本最多記録で、考古学界・古代史学界に大きな衝撃を与えた。

前述した加茂岩倉遺跡の銅鐸とともに、古代出雲には大きな勢力が存在していたことが明らかとなったのである。

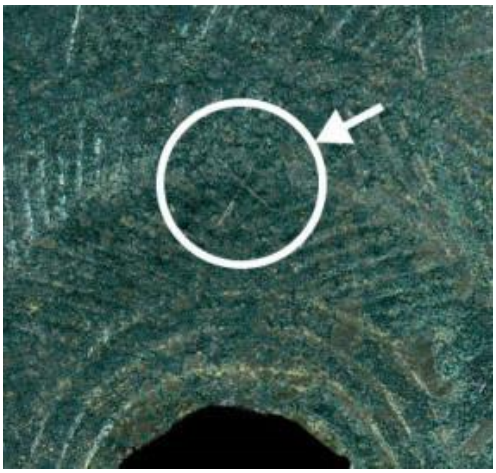
銅剣は丘陵の斜面に作られた上下 2 段の下の段に、刃を起こした状態で 4 列に並べられて埋められていた。すべて中細形 c 類の銅剣で、長さ 50cm 前後、重さ 500g あまり。弥生時代中期後半の作とみられ、形式が単一であることから同一の地域で作られた可能性が高い

とみられている。

344 本の銅剣の茎部に鋳造後に工具で×印が刻まれているが、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸にも同様の×印が刻まれており、両遺跡の青銅器が同一の生産集団によって製造された可能性が高いとみるのが自然であろう。



銅矛の×印



銅鐸の×印

水野裕氏の出雲論

『古代出雲と風土記世界』(瀧音能之編・河出書房新社・1998)のなかに、早稲田大学名誉教授であった水野裕氏(1918～2000)が、「古代の出雲的世界」という論考を掲載されている。そのなかの一部を抜粋して紹介しよう。

❖二つの出雲神話

私は早くから二つの出雲神話という概念を樹立していた。『出雲国風土記』の神話は、在地の出雲人によって語り継がれた全く別な地域的体系をもつ神話が見られる。しかし「記紀」などの中央神話の中にはその片鱗すらみられない。「紀」のような本文とは別な異説を並記している一書の説にさえ出雲独自の神話は殆ど姿を現わしていない。にも拘らず「記紀」の出雲神話として扱われているものは、分量からみて全日本体系神話の半分に匹敵する。出雲人の語らない出雲神話が、異郷人である大和人の日本神話の中におこがましくも堂々と出雲神話として伝えられる。おかしいではないか。

ところで最近出雲では矢継速に青銅器の莫大な発見が相次ぎ、世間を驚かしている。即ち昭和五十九年（西暦一九八四年）に簸川郡斐川町神庭荒神谷遺跡から中細形銅剣三百五十八本が神庭西谷の斜面中腹から出土し、次いで翌昭和六十年にこの銅剣出土地点の東方僅か七メートルの地点から銅鐸六個と銅鉾十六本とが同じ埋納坑から出土したことから特に注目を浴びるに至った。そして十二年後の平成八年（西暦一九九六年）十月に、大原郡加茂町大字岩倉字南ケ廻（みなみがさこ）で、一括埋納された形で三十九個の銅鐸が発見されたのであった。前の荒神谷の事例に加えて、これは古代出雲の研究の上において、まことに由々しいことになったのである。

❖古代の出雲世界は銅鐸の国？

閑話休題。前に私は神話について、大和人の出雲神話と、出雲人の出雲神話と、出雲神話といってもこの二種があり、前者はまがいものの出雲神話で、後者こそ正真正銘の出雲神話であると峻別した。ところが昨今「神話の国出雲」が一転して「青銅器の国出雲」に変容しそうな趨勢である。喜ぶべきか悲しむべきか。

❖むすび

出雲が加茂岩倉遺跡をはじめ、荒神谷や志谷奥などの遺跡の存在する限り、私は出雲こそ日本における銅鐸文化の発祥の中心地であるとするのに吝かではないが、なお前記二点についての解明がなされない限り、決定的なことは断定できない。今日このような出雲にみる銅鐸遺跡の発見によって、日本の博物館学派とも見らるべき考古学の専門家達の間で

は、従来の文化圏論の影響や、あるいは大和説論の立場から、やはり出雲の銅鐸は大和ないし近畿地域からの銅鐸の移入であるとする説が盛行しているようであるが、私は納得できない。現在までのところ統計学的にみても出雲こそ銅鐸の発祥地であったとみるべきであると信じている。銅鐸についての私見も多々あるがいずれも確実な傍証となるべき事実すら的確につかめていないので、それらの見解は公表していないが、ただ基本的には私は銅鐸をもって大地母神にまつわる一つの象徴物と考えているのである。目下のところ私としては出雲国内から破片でもよいから銅鐸の鋳型の出土を鶴首しているというのが真実である。

銅鐸ばかりが出雲を象徴するわけではない。古代の出雲世界の実態は、何といっても出雲に関する絶対的な権威をもっている『出雲国風土記』の記述の正確なる理解の一言に尽きるというのが私の信念である。

解説するまでもないが、一応解説しておこう。

(一) 戦後における『古事記』『日本書紀』の否定・抹殺

『古事記』『日本書紀』に記載された出雲神話と『出雲国風土記』に記載された出雲神話のうち、前者はまがいもので、後者は在地の出雲人に語り継がれた真実の神話である。――この水野裕氏の論は、戦後の『古事記』『日本書紀』否定・抹殺論に立脚していることはいうまでもなかろう。

大正 7 年 (1918) 生まれで、昭和 16 年 (1941) に早稲田大学文学部史学科国史専攻を卒業され、終戦時には 28 歳である。早稲田大学文学部といえば、津田左右吉 (1873～ 1961) の牙城である。津田氏は、終戦の年 73 歳である。

第二次世界大戦が終結し、わが国は米軍を主力とする連合軍の占領下に置かれ、天皇の絶対的権威と戦前・戦中の歴史教育のいっさいが否定された。

恒久的平和を謳った新しい憲法も制定され、天皇は日本国及び日本国民統合の象徴として存続するものとされた。日本の神話についても、天皇の支配者としての地位を正当化するために大和朝廷の役人が机上でつくりあげたものであるとされ、『古事記』『日本書紀』は教科書から追放されてしまった。

このような戦後の風潮の中心に据えられたのが、早稲田大学の津田左右吉であった。彼の著作が昭和 15 年（1940）に発売禁止の処分をうけ、彼自身出版法違反で起訴されたこ

ともあって、民主主義の世になるとともに、津田左右吉は英雄のようによみがえり、彼の説は戦後史学の主流となった。

「邪馬台国論が天皇制のタブーから解放され」(佐伯有清『研究史邪馬台国』(吉川弘文館、昭和 46)、「これまで金玉の文字と仰がれていた書紀の記事などはすべて怪しいものとなった代わりに、魏志が何よりも信頼すべき上代史となった」(肥後和男『崇神天皇と卑弥呼』弘文堂、昭和 29 年)。

くわえて、唯物史観史学が台頭し、邪馬台国時代の階級構造、生産状況、政治情勢などが好んでテーマに取り上げられるようになった。

昭和 25 年、藤間生大氏は『埋もれた金印』において、邪馬台国における王権構造や階級制度、社会的な生産力、国家構造などの分析をおこなった。

これに応じる形で、上田正昭氏や井上光貞氏、北山茂雄氏、直木孝次郎氏らによる活発な論戦がおこなわれ、記紀神話を徹底的に否定する戦後の学界の基本スタンスが確立され、現在に至るまで学界のいわば主流として次世代に継承されつづけている。

(二)「神話の国出雲」から「青銅器の国出雲」へ

水野裕氏の二つの出雲神話論も、そのような戦後の風潮を受けて書かれたことは明らかである。

ところが、その出雲から大量の青銅器が発掘された。そして、こう書かれる。

「これは古代出雲の研究の上において、まことに由々しいことになったのである」

「大和人の出雲神話と、出雲人の出雲神話と、出雲神話といってもこの二種があり、前者はまがいものの出雲神話で、後者こそが正真正銘の出雲神話であると峻別した。ところが昨今、『神話の国出雲』が一転して『青銅器の国出雲』に変容しそうな趨勢である。喜ぶべきか悲しむべきか」

そして、本当の敵はすぐうしろにいる。

――その大量の青銅器はわれわれ近畿が出雲に下げ渡したものですよ。

近畿中心史観主義者が例によって主張する。出雲の銅鐸は近畿の銅鐸なのである。

出雲国粋主義者の水野博士はそれに対して、

「出雲こそ銅鐸の発祥地であったとみるべきであると信じている」

と叫ばれるが、心なしか勢いがない。出雲から鋳型が出てこないのである。

「目下のところ私としては出雲国内から破片でもよいから銅鐸の鋳型の出土を鶴首しているというのが真実である」

水野裕氏は 2000 年(平成 12)に亡くなられたが、もちろん出雲において銅鐸の鋳型を目にされることはなかった。

歴史に対して「こうあるべきだ」と演繹的に挑むと、予想もしない事態が出現して、「あるべき姿」が幻のごとく消えていくことがある。

『古事記』には、大国主命が「八千矛神」と称したとも書かれている。「多くの武器を持った大王」とでもいうような意味であろうが、そうであるとすれば、荒神谷遺跡から出土し

た銅剣 358 本と銅矛 16 本は、まさしく出雲の大王を象徴する武器ではないか。
逆にいえば、出雲から「八千矛」が出土するのではないか。――『古事記』『日本書紀』をしっかり読めば、そのように推理することも可能であったはずである。
しかしながら、『出雲国風土記』のみ信奉し、『古事記』『日本書紀』をゴミ箱に捨ててしまえば、予想外の大量の青銅器の出現に慌てふためくばかりであろう。

『日本書紀』の再評価

戦後史学の主流は依然として『古事記』『日本書紀』の否定・抹殺論者で占められているが、発掘調査が蓄積されるにつれて、
――『日本書紀』は裏切らない。
と考える発掘担当者も確実に増加しているのではないか。
私自身、九州における膨大な景行天皇伝承、神功皇后伝承を追いかけたが、『日本書紀』との整合性に心底驚愕した経験を有している。
飛鳥や奈良などで発掘調査された遺物・遺跡についても、『日本書紀』に基づいて説明される事例をしばしば見かける。
いずれ近畿の古代史についても、『日本書紀』および『古事記』など日本の文献によって網羅的・体系的に説明される時代が到来すると確信しているが、現状は「邪馬台国近畿説」によって説明しようとする無謀な試みの真っ最中である。
そのシンボルともいえる纒向遺跡の発掘調査についても、2022 年で 50 周年を迎え、調査回数は 200 回を超えたといわれている。
1 回 1 億円としても、200 億円である。延々と 50 年間も国費が投じられているが、何しろ「魔性の遺跡」(森浩一氏) である。
いずれ、とんでもない何かが出土する可能性がある。卑弥呼と無関係の墓誌などが出ようものなら即アウトである。そのときになって慌てふためいても手遅れである。

銅鐸の鋳型が九州から出土

話が大きく反れたが、1980 年 (昭和 55) に佐賀県鳥栖市の安永田遺跡から銅鐸の鋳型が出土し、考古学界・歴史学界に大きな衝撃をあたえ、テレビ・新聞などマスコミでも大きく報道された。
水野裕氏も当然ご存じだったはずである。
にもかかわらず、九州から目をそむけ、「出雲国内から破片でもよいから銅鐸の鋳型の出土を鶴首している」と嘆かれたのは、その 18 年後なのである。

佐賀県鳥栖市で開催されたシンポジウム

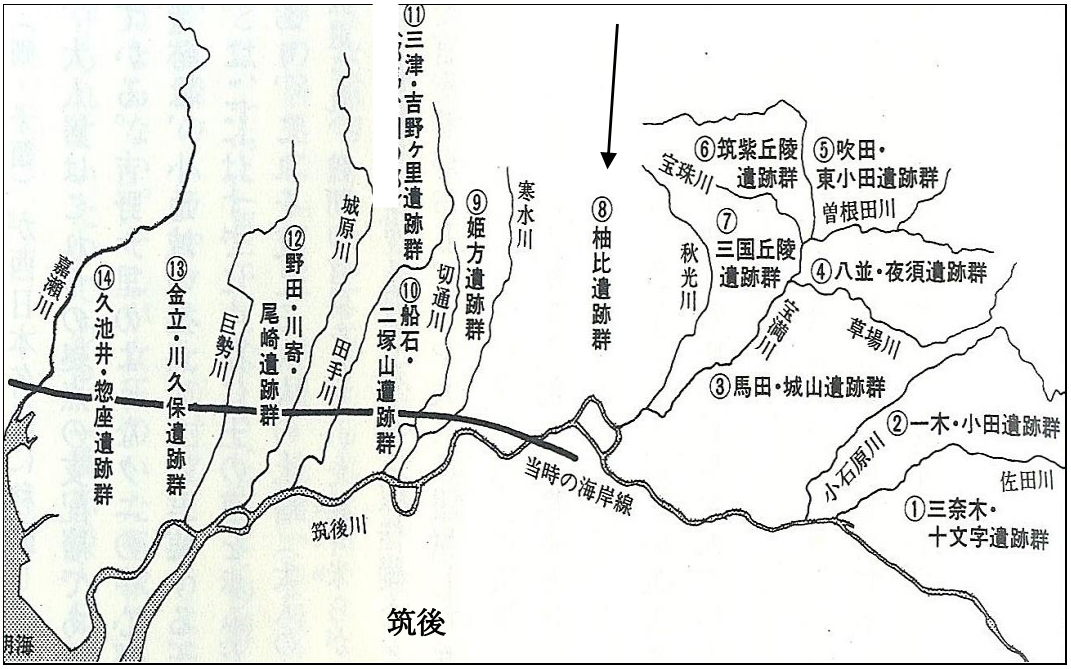
『銅鐸と女王国の時代』(日本放送協会・昭和 58) という書物がある。松本清張編になるものである。

これは、佐賀県鳥栖市で開かれたシンポジウム「鳥栖銅鐸と二〇〇〇年前の西日本」の概要をまとめた書物である。

（肩書は当時・敬称略）

コーディネーター		松本清張（作家）
パネラー	**九州**	岡崎敬（九州大学教授）
		高島忠平（佐賀県教育委員会）
		高倉洋彰（福岡県立九州歴史資料館）
		藤瀬禎博（鳥栖市教育委員会）
	近畿	門脇禎二（京都府立大学教授）
		佐原眞（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）
		水野正好（奈良大学教授）

ちなみに、安永田遺跡（鳥栖市柚比町安永田）が所在する「柚比遺跡群」の位置は下図のとおりである。



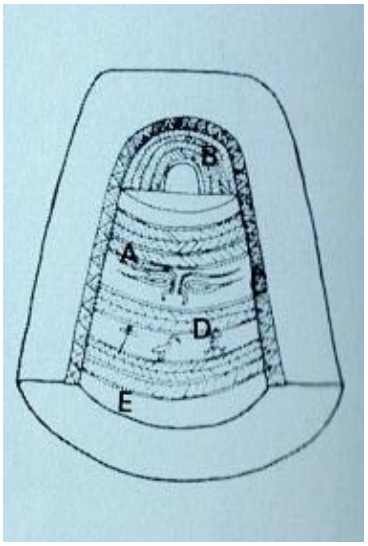
安永田遺跡（鳥栖市柚比町安永田）は、脊振山地東端の九千部山の南麓に派生する谷の入り組んだ標高約 50 メートルの丘陵鞍部の傾斜地にある。

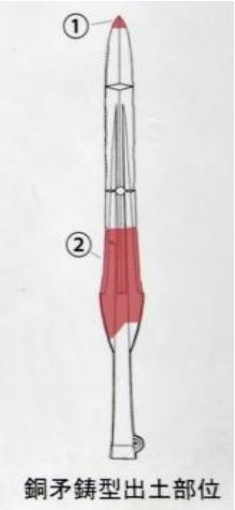
この遺跡からは、1913 年（大正 2）の耕地整理の際に大量のカメ棺が発見され、いくつかの銅戈・銅矛が出土したことで知られていた。

この遺跡から、1980 年（昭和 55）に銅鐸の鋳型が発見されたのである。

弥生時代中期末ごろの土器とともに、扁平鈕式の横帯文銅鐸（福田型邪視文銅鐸）の鋳型と中細・中広式銅矛の両者型を彫った鋳型および星形石器が出土した。

安永田遺跡工房跡





銅鐸鋳型出土部位

調査地区は、北方向から狭く深く谷が入り込む地形で、この谷頭を取り囲むようにして 58 基の竪穴式住居跡が見つかった。このうち 36 軒が弥生時代中期の後半から末の紀元前後の住居跡である。谷底にもっとも近いところから青銅を溶かしたとみられる炉の跡が見つかった。谷底に作ったのは谷間の風通しを利用するためとみる説もある。

4, 400 ㎡が史跡に指定され、出土した銅鐸鋳型 5 点、銅矛鋳型 5 点の計 10 点の鋳型片は、一括して国重要文化財に指定された。

現在史跡公園として整備されており、青銅器鋳造遺構が原位置の上に復元展示されている。

春日市大谷の小銅鐸の鋳型

安永田遺跡から銅鐸の鋳型が出土したのは 1980 年(昭和 55)であったが、実は 1977～78(昭和 52～53)に、春日市の大谷遺跡から小銅鐸の破片が出土し、九州大学の岡崎敬教授

や九州産業大学の森貞次郎教授らによって確認報告されていたが、近畿や東京の研究者たちからまともに相手にされなかったようである。

大分県宇佐市の別府(びう)遺跡出土の朝鮮式小銅鐸

1977年(昭和52)に宇佐市の別府遺跡で発見されたこの小銅鐸は、わが国で最初に発見された朝鮮式小銅鐸とされる。総高 11.6ｃｍで、韓国慶尚北道月城郡入室里遺跡発見の第1号小銅鐸と形状・法量ともによく似ているとされる。

しかしながら、別府大学教授下村智氏による3D 計測を用いた研究によると、日本製の可能性が高いという(下村智・玉川 剛司「新領域研究としての遺物の3D 計測とその方法」2020)。

大分県大分市大字横尾の多武尾遺跡出土の小銅鐸

ついでながら、大分県大分市大字横尾の多武尾遺跡から、昭和 54 年(1979)と昭和 56 年(1981)の2回の調査の際、6号溝から、大分県内で2例目となる小銅鐸が発見された。

鈕(ちゅう)と裾部が欠け、全体の3分の1しか残存していないが、復原すると高さ 5.5㎝以上で、朝鮮式小銅鐸の系列に属するという。

春日市岡本四丁目の小型銅鐸の鋳型

1979年(昭和54)に春日市岡本四丁目の遺跡から弥生中期の小型銅鐸の鋳型の完成品が出土した。しかしながら、このことについても近畿・東京の研究陣から黙殺されたという。

こういう経緯があったのちの 1980 年(昭和 55)における安永田遺跡の銅鐸鋳型の出土である。

「九州における初めての発見」とマスコミによって大きく報道されたこともあって、考古学界・歴史学界に大きな衝撃をあたえ、古代史ファン・一般市民の間に大きな関心が巻き起こったのは自然の流れであった。

福岡市赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鋳型

ところが、1982 年(昭和 57)には福岡市の赤穂ノ浦遺跡から、横帯文の銅鐸の鋳型が出土したのである。

これらのことによって、銅鐸が九州において製造されていたことがほぼ確定したが、主たる生産地を九州とすることについては、もちろん近畿は納得するわけもなく、その文献名は忘れてしまったが、近畿から九州に発注して出雲に下げ渡したなどとするアホな説を読んだ記憶がある。

さらには、九州から出土する鋳型は石製であるが、近畿の土製の鋳型が先進的とする説なども提示され、迷走に迷走を重ねているのが銅鐸の製作地をめぐる現状といっていい。

「磨古・鍵考古学ミュージアム」の「ミュージアムコレクション 8」には、石製の鋳型には欠陥があり、土製の鋳型にはその欠陥がないと堂々と書かれている。

石製鋳型は、丈夫で６回前後も使えますが、青銅を流し込んだ時に発生するガスを逃がすのが難しく、失敗する確率が高い鋳型です。また、最適な石材の入手や大きさには限界があります。これに対して土製鋳型は、前述した石製鋳型の欠点がないので優れています。特に銅鐸が大型化する弥生時代後期以降に土製鋳型へと移行しました。

しかしながら、石の鋳型は何度でも再使用できる。土の鋳型は一回しか使えない。どちらが効率的かあるいは先進的か子どもでもわかる。

石製から土製の鋳型に変化していったのは、デザインの複雑化や銅鐸の大型化への対応など、別の理由があったからではないか。

銅鐸型土製品

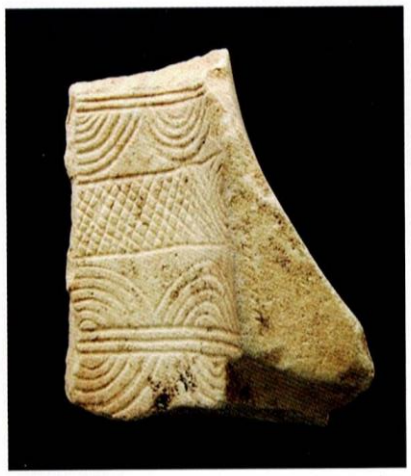
それはともかくとして、北部九州では石製の銅鐸鋳型のほか、銅鐸型土製品が各地から出土している。佐賀県の詫田貝塚から弥生中期前半とみられる銅鐸型土製品が出土し、佐賀県川寄若宮などからも出土している。

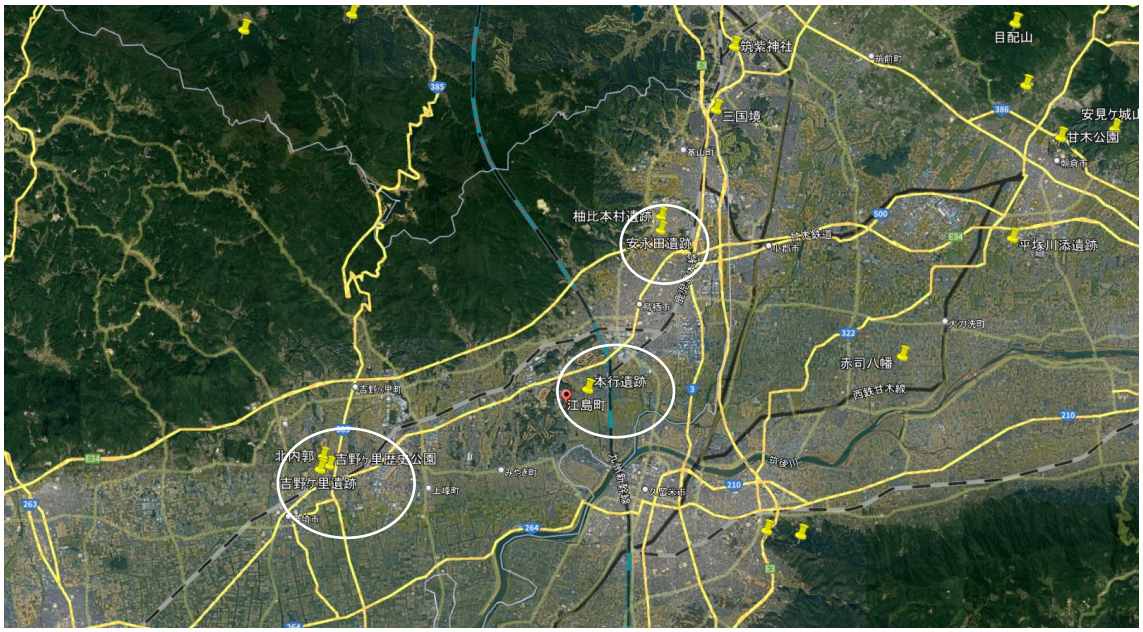
銅鐸型土製品の性格についてはよくわからないが、祭祀用というよりも、デザインの継承のためであった可能性もあり得よう。

川寄若宮の銅鐸型土製品

鳥栖の本行（ほんぎょう）遺跡

また、柚比遺跡群の南西方向に位置する鳥栖市江島町の本行遺跡からも、1991（平成 3）～1994 年（平成 6）までの調査で、12 点の青銅器鋳型が出土した。ヤリガンナ・銅剣・銅矛および銅鐸である。石英長石班岩製の銅鐸鋳型は、長さ 10 センチ、幅 7.9 センチで、鋳型面以外は砥石として使用され、かなり摩耗していた。この鋳型から鋳造された銅鐸は、高さが 18 センチ前後で、安永田遺跡よりも小型とみられている（藤瀬禎博『九州の銅鐸工房』新泉社）。





銅鐸そのものの出土

そして、銅鐸そのものが九州から出土した。ほかならぬ吉野ケ里遺跡からである。

1998 年（平成 10）、発掘調査に先立つ表土除去作業中、紐（ちゅう・釣り手）を下に向け、

逆さに埋められた銅鐸が出土した。

吉野ケ里遺跡出土の銅鐸

その後の調査で、同じ鋳型でつくられた銅鐸が存在することがわかった。

島根県島根県松江市宍道町から出土したとされる「福田型邪視文銅鐸」――扁平紐式に属する銅鐸である。

佐賀県の安永田遺跡から出土した銅鐸の鋳型も、「福田型邪視文銅鐸」のデザインであった。下記のとおり、大きさは多少異なるが、おなじデザインの銅鐸が西日本各地から出土している。

福田型邪視文銅鐸の出土地

安永田遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸【鋳型】	佐賀県鳥栖市柚比町安永田	200㎜±
伝出雲国出土銅鐸	2 区横帯文	邪視文銅鐸	島根県松江市宍道町	223㎜(残存) 同笵
吉野ヶ里遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町	280㎜
伝伯耆国出土銅鐸	2 区横帯文	邪視文銅鐸	鳥取県鳥取市東町	197mm
福田(木の宗山)遺跡	2 区横帯文	邪視文銅鐸	広島県広島市東区福田	195㎜
伝上足守出土銅鐸	3 区横帯文	邪視文銅鐸	岡山県岡山市足守	178㎜

福田型邪視文銅鐸

福田型と呼ばれるのは、初例が広島市東区福田(木の宗山)から発見されたことに基づく。
魔除けなどのためか、眼や顔を表現したデザインを「邪視文(じゃしもん)」と呼ぶ。

ちなみに、安永田遺跡から出土した鋳型をもとに復元された銅鐸は次のとおりである。

鳥栖市教育委員会

以上述べた九州の銅鐸関連の動きを時系列的にまとめると次のとおりとなる。

九州における銅鐸関連の動き

1977～78（昭和 52～53）	大谷遺跡（春日市）から小銅鐸の破片が出土
1977 年（昭和 52）	別府遺跡（大分県宇佐市）から朝鮮式の小銅鐸出土
1979 年（昭和 54）	岡本四丁目遺跡（春日市）から小型銅鐸の鋳型が出土
1980 年（昭和 55）	安永田遺跡（佐賀県鳥栖市）から銅鐸の鋳型が出土
1982 年（昭和 57）	赤穂ノ浦遺跡（福岡市）から横帯文銅鐸の鋳型が出土
1982 年（昭和 57） 8/1	「鳥栖銅鐸と二〇〇〇年前の西日本」シンポジウム（鳥栖市）
1998 年（平成 10）	吉野ケ里遺跡から銅鐸出土

予想外の展開となったシンポジウム

さて、1982 年（昭和 57） 8 月 1 日に鳥栖市において開催された「鳥栖銅鐸と二〇〇〇年前の西日本」の件である。

予想外の展開となったのである。邪馬台国近畿説の重鎮ともいえる門脇禎二（京都府立大学教授）が、シンポジウムに先立っておこなわれた基調講演において、突然、邪馬台国近畿説から九州説への転向を表明されたのである。

そのあとの基調講演のなかで、佐原眞氏は次のように述べた。

シンポジウム用のカタログは、藤瀬さんと一週間で編集した。こうして市民参加シンポジウム「鳥栖銅鐸と二〇〇〇年前の西日本」は、一九八二年八月一日（日曜日）九時半から夕方五時まで、市民一、二〇〇名を集めて開催されたのである。

門脇禎二さんは飛行機に乗らない主義である。京都から水野正好さんともども新幹線で博多に向かい、道中はもちろん銅鐸や邪馬台国が話題になった。しかし、いよいよ会が始まり、控えの間で門脇さんのスピーチをマイクを通して聴き唖然（あぜん）とした。邪馬台国九州説の論が展開されているではないか、あわててカタログをみる。発表要旨にはそんなことは書いてない。車中でも一向にそんなことはうかがっていなかった。私はショックを取りつくろって登壇した。

そして、シンポジウムの総括に指名された佐原眞氏は、門脇禎二氏に対して嫌味をいうことを忘れなかった。

佐原　あまりにも違う考えを、それぞれの講師が抱いているということがよくおわかりと思います。とてもまとまりませんので、まとめはいたしません。

あらゆる旧説というのは、かつて最新の学説でありました。異なった考えを戦わして、定説を打ち破ることで学問は前進をする。でありますから、いまここで語られたことが、銅鐸に関しても、邪馬台国に関しても、現状であると摑んでいただくほかはないのであります。私がとても嬉しかったことは、これだけ考え方が違う講師が、和気藹々と、とにかく話し合うことができたということであります。岡崎先生は、大所高所から意見を述べられて、プロフェッサーの権威を示していただきました。門脇先生は、明日畿内にお帰りになりまして、ずっと畿内にお暮らしになることと思いますが、なかなかしんどいこととお察し申し上げます。(笑) 水野さんは、嘘か本当かわからないけれども、たいへん明快な畿内説をお出しになりました。私としては、徹底的に話し合って、さらに切磋琢磨しなければならないと思っております。また高島さんは、考古学的な事実の積み上げから、具体的に九州に三十国を図示してくださいまして、考古学の立場からの、九州説の新しい代表者としてデビューされました。私どもにとっては新しい脅威となりました。そして松本先生は、確固たる邪馬台国論をお持ちになりながら、シンポジウムではむしろ聞き役に徹してくださいました。「第Ⅰ部」の特別講演といい、シンポジウムの名司会といい、作家としてでない、私たちの知らない面での天分を見せていただきました。また高倉さんは、九州の研究者として、非常に精密な、銅鐸に関するアカデミックな見解を示してくださいました。私は銅鐸を長く勉強しながら、ああとでも言える、こうとでも言えるというような、あまりはっきりとした態度をとらなかったことを反省しておりまして、大いにこれから発奮したいと思います。頑張りたいと思っております。

藤村新一によって長年継続された「前期旧石器」に疑問を投げかけた東京都教育委員会の小田静夫氏が、佐原眞氏の意向によって伊豆諸島に左遷されたというような噂話を聞いたことがある。

1997年(平成9)に国立歴史民俗博物館の第4代館長に昇りつめた佐原眞氏は、公平中立であるべき立場にありながら、公然と邪馬台国近畿説の普及広報に力を注ぎ、現在に至る邪馬台国近畿説の流れをつくった。しかしながら、晩年には小田静夫氏を病室に招き、陳謝されたとも伝わる。そして、2002年(平成14)に71歳で病死された。

門脇禎二氏の遺作

門脇禎二氏もまた、2007年(平成19)6月12日に83歳で逝去されている。

そして、その1年後の2008年(平成20)6月10日に吉川弘文館から『邪馬台国と地域王国』という書物が発刊された。門脇禎二氏の遺作であった。

その「あとがき」を紹介させていただこう。

著者門脇禎二先生は、本書の製作途中で亡くなられました。ご遺族のお許しを得て、製作に若干のお手伝いをさせていただいた私たち二人が、〝あとがき〟を書くことになりました。著者が生前に遺されたメモや出版社あての依頼状をもとに本書の刊行意図をのべ、あわせて製作過程のことを少々書かせていただきます。

本書の構成は三部からなっています。Ⅱ・Ⅲは一章を除き、著者がここ五年ほどの間に発表したものを編成したものですが、Ⅰは大部分が新稿です。

著者がこの本で論じようとした主題は大きくいって二つあります。一つは、三世紀から七世紀までを見通した古代国家形成史で、Ⅰの「邪馬台国論」とⅡの「地域王国の競合とヤマト王国」が、その問題を扱っています。二つめは国家の形成過程の基底にある、民族あるいは民族文化の形成にかかわる問題です。Ⅱの一部やⅢの「民族文化の形成」が、それを論じています。

従来前方後円墳という墓制形式の全国的な拡がりをもって、国家形成の直接的な指標とする議論が、主として考古学者によりなされていますが、著者はそれを葬礼文化の共通性を示すものととらえ、日本の民族形成の展開を端的に物語るものとする見方をとります。Ⅲでは民族文化形成の問題が、さまざまな場や地域で、またいろいろなテーマで論じられています。

この本の出版が決まったのは二〇〇五年の秋でした。数年前より著者の体調は思わしくなく、入退院をくりかえしておられました。その中でⅠの邪馬台国論は書かれました。一九九八年の高槻市でのシンポジウムの際に用意された原稿が一部もとになっていますが、大部分は病床にあって筆をとられ

たものです。邪馬台国＝北九州説は、著者の年来の主張である〝地域王国論〟の延長上に位置づけられるものですが、著者が九州説に立って邪馬台国を真正面から論ずるのはこの本がはじめてです。

著者はこれまで邪馬台国＝大和説に立って本を書き、論文を発表してきました。それだけに今回の邪馬台国論は大変なご苦心があったことと想像されます。しかし、ご自分の人生の終わりの近いことを予期された著者は、三世紀からの古代国家形成史を九州説に立って何としても完結させたい思いで執筆をつづけられたのだと思います。

しかし、ご病気の進行は、著者の意図したところを論じ尽し、書くことを許しませんでした。たとえばⅠの最後に予定されていた前方後円墳論――著者のつけた題名は「前方後円墳の広がりと民族形成の進展」です――はついに書かれませんでした。その点で本書のテーマの一つである民族形成論は、古墳論に関しては問題提起にとどまらざるをえないものになりました。

また、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲともに部分的に重複したところが認められます。著者はそれを削除訂正することを考えておられましたが、果せませんでした。読者のご諒解を得たいと思います。

Ⅱ・Ⅲの原稿は、著者自身が二〇〇五年末に、出版が決まった段階で吉川弘文館に渡し、編集作業が行われましたが、Ⅰは著者が二〇〇七年六月に亡くなられた後、私たち二人が分担して原稿を整える作業を行い、同年末に原稿を送付しました。

校正では、京都府立大学の櫛木謙周氏に多大のご助力をいただき、考古学に関する記述の一部については、大阪府立近つ飛鳥博物館の藤田憲司氏にご教示をうけました。お二人のご厚情に深く感謝します。

なお、本書の出版にあたっては、吉川弘文館編集部の大岩由明氏にお世話になりました。また、編集担当の重田秀樹氏、製作を担当した有志舎の永滝稔氏にも謝意を表します。

二〇〇八年三月

狩野　久
佐藤宗諄

1982年(昭和57) 8月1日佐賀県鳥栖市で開催されたシンポジウムにおいて、近畿説から九州説に転向することを表明して2007年(平成19)に死去されるまで25年。

その間のおもな著作は次のとおりである。

『葛城と古代国家』(教育社・1984)
『古代史をどう学ぶか』(校倉書房・1986)
『日本海域の古代史』(東京大学出版会・1986)
『検証古代の出雲』(学習研究社・1987)
『吉備の古代史』(山陽放送・1988)
『「大化改新」史論』上下(思文閣出版・1991)
『吉備の古代史』(日本放送出版協会・1992)
『飛鳥古京』(吉川弘文館・1994)

『古代日本の「地域王国」と「ヤマト王国」』上下（学生社・2000）
『葛城と古代国家』（講談社・2000）
『飛鳥と亀形石』（学生社・2002）
『古代出雲』（講談社・2003）
『邪馬台国と地域王国』（吉川弘文館・2008）

出雲や吉備などのいわゆる地域王国を主たる対象として、その研究が深く堀り下げられているのがよくわかる。

しかし、鳥栖のシンポジウム以降もその信念をまったく曲げておられないことは明らかであるにもかかわらず、邪馬台国論に関する著作は、何ゆえか、最後の著作を除いてまったくない。

すなわち、門脇禎二氏は出雲や吉備の地域王国を論じることによって、反射的に近畿邪馬台国説の否定を論じられていたのである。

「原出雲国は、当時は大和より北部九州との接点のほうがはるかに強く多様であったし、吉備津とその後背地は、楯築墳丘墓に象徴されるように、大和の『統属』下どころか逆に前期古墳の出現過程では大和に一歩先んじていた」（『邪馬台国と地域王国』P29）

「出雲・吉備ついて得た右の点に自信を得た私は、同様の視点で筑紫・丹後・越前等へも検討をすすめた」（同書 P30）

地域王国論の考察を進めるほど近畿大和説への不安感が増大し、ついに近畿大和説から脱却せざるを得なくなり、鳥栖での転向表明に至った。

その後もその歩みを進めて地域王国論に基づく邪馬台国九州説を確信され、遺作として残されたのである。

そのなかで、邪馬台国近畿説の基本的な欠陥を指摘される。

「『倭人伝』の方位――とくに投馬国以降の旅程の方位の『南』を『東』と読み替えることである」

『魏志倭人伝』の「南邪馬台国に至る。女王の都する所なり。水行十日陸行一月」について、近畿説論者は、例外なく「南」を「東」へ読み替える。そして、その根拠についてはほとんどの近畿説論者が知らん顔をつづけている。そこへ登場したのが、

「混一疆理歴代国都之図（こんいつきょうりれきだいこくとのず）」

である。

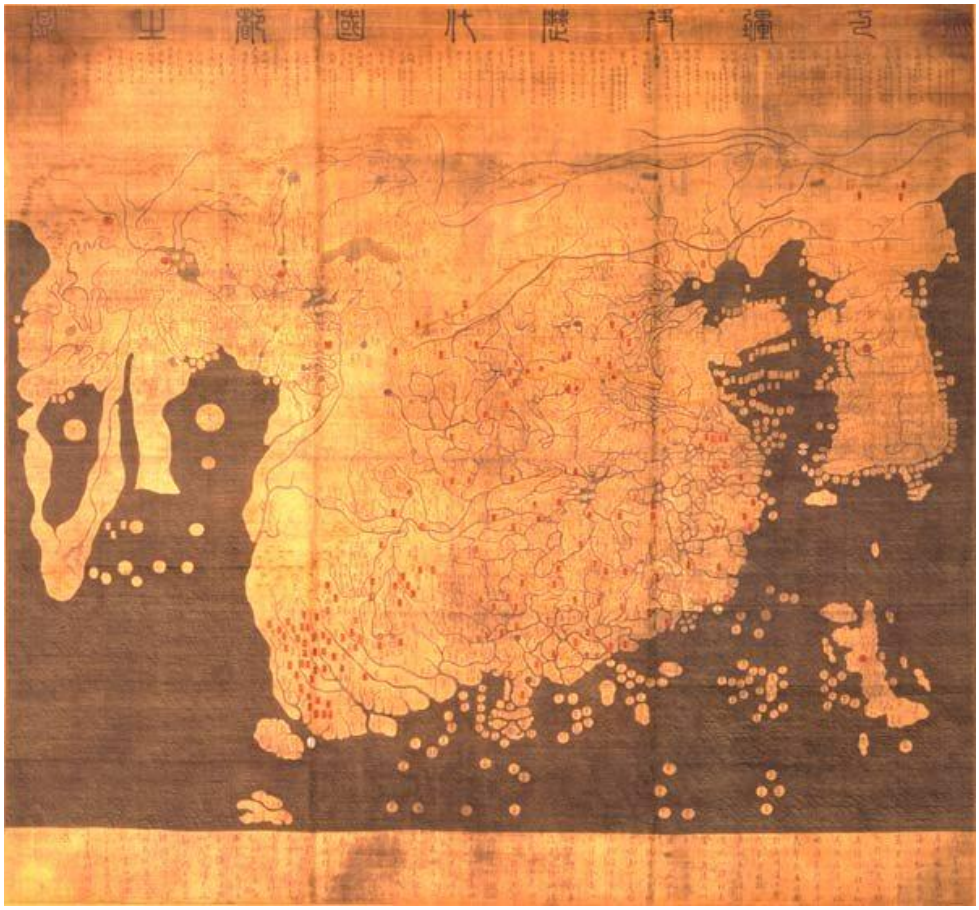
下図のように、日本列島と東西ではなく南北に描かれている。

つまり、この地図の「南」は、実際には「東」ではないか。よって『魏志倭人伝』の「南」は「東」のことである、という近畿説の読み替えの根拠とされたのである。

ところが、弘中芳男氏の研究によると、この地図は朝鮮で 1402 年に製作された地図が基になっているという。すなわち、中国からもたらされた「混一疆図」などに、日本の「行基図」を補入したもので、それが 1472 年ごろ模写されたものが龍谷大学に現存する

「混一疆理歴代国都之図」であるという。

したがって、このような後世の地図をもとに、『魏志倭人伝』の方位修正に用いることは「まったく無意味」（門脇禎二氏）となる。



近畿説にとって、「南」から「東」への読み替えは、必要不可欠な絶対条件である。

にもかかわらず、その証明はまったくなされていない。

近畿説最大の欠陥である。

しかしながら、門脇禎二氏は、学問的良心という立場からそれを無視することはできなかった。その不安に耐えることができなかった。

近畿説の人々は知らん顔をつづけているが、本当にそれでいいのか。

門脇禎二氏に続く勇気ある後輩はいないのか。

銅鐸から門脇禎二氏へと話題が移ってしまったが、今回にかぎっては、全く悔いはない。

門脇禎二氏の誠実で勇気ある研究者魂を紹介できたことを心から喜んでいる。